



Title	Inhibition of Murine Transformed Leydig Cell Proliferation by Leukotrienes in Serum-Free Culture
Author(s)	西井, 一雅
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37716
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	にし い かず まさ 西 井 一 雅
博 士 の 専 攻	博 士 (医 学)
分 野 の 名 称	
学 位 記 番 号	第 1 0 0 8 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 4 年 3 月 16 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 则 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	Inhibition of Murine Transformed Leydig Cell Proliferation by Leukotrienes in Serum-Free Culture (無血清培地下でロイコトリエンによるマウス睾丸間質細胞腫由来エストロゲン依存性細胞株の増殖抑制)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 岸本 忠三 (副査) 教 授 北村 幸彦 教 授 萩原 俊男

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

ステロイド依存性癌増殖の分子機構は不明である。この問題を解決するためには種々の人工的修飾因子を最小にしたモデル系が必要であると思われる。我々が樹立したマウス睾丸間質細胞腫由来培養株B-1Fは、無血清培地で、しかも既存の接着因子や増殖因子を加えない条件下で、エストロゲン依存性増殖を示す。一方、5-リポキシゲナーゼ阻害剤によっても増殖が促進される。そこでエストロゲン依存性増殖がアラキドン酸代謝を修飾することにより生じる可能性を検討した。

(方 法)

- (1) 細胞増殖: B-1F細胞は無血清培地 (HamF 12:MEM (1:1) - 0.1% bovine serum albumin (HMB) - 10^{-8} M estradiol (E₂) 中で継代培養した。細胞増殖に対する影響は細胞をプレーティングと同時に種々の物質を加え、通常は48時間毎に培地を交換し、6日目の生細胞数又は、3日目のDNA合成を指標として測定した。ロイコトリエン (LT) の添加実験では、その不安定性を考慮し培地は24時間毎に交換した。
- (2) LT濃度測定: B-1F細胞をプレーティングし、2日間種々の刺激物質存在下で培養後、培地を交換し、各種LT濃度を radio immuno assay により測定した。
- (3) LTD₄レセプター測定: B-1F細胞の細胞膜分画と0.1~2nM [³H] LTD₄を competitor 存在、または非存在下で20°C、30分インキュベーション、GF/C filter 上に膜分画を吸着させ、その radio activity を測定した。特異結合を Scatchard 解析した。
- (4) リポキシゲナーゼ活性測定: B-1F細胞を48時間 10^{-8} ME₂と存在又は非存下で培養後可溶性分画

を調整した。これを $10\mu\text{M}$ [^3H] アラキドン酸と 30°C 、5分インキュベーションし、抽出操作後、HPLCで分離し、各HETE分画のradio activityを測定した。

(5) phospholipase A₂ (PLA₂) 活性測定：B-1 F細胞を 10^{-8}M E_2 と存在又は非存在下で48時間培養した後、 [^3H] アラキドン酸と4時間インキュベーションすることにより、B-1 F細胞のリン脂質を [^3H] アラキドン酸で標識した。培地を変更後、培地中に遊離してくる [^3H] アラキドン酸量を PLA₂活性とした。

(結 果)

- (1) 培地中にアラキドン酸 ($0.2 \sim 1\mu\text{M}$) を添加すると、濃度依存性は細胞増殖が抑制された。アラキドン酸の抑制効果は 10^{-8}M E_2 添加により部分的に阻止された。
- (2) B-1 F細胞の増殖は LTC₄, D₄, E₄ ($10^{-9} \sim 10^{-7}\text{M}$) によっても濃度依存性に抑制された。各種 LTによる抑制は同等で、非添加時を100%として表示すると、E₂存在下では最大効果は70%抑制であった。
- (3) B-1 F細胞のLT産生能を検討すると、7時間培養でも培地中に LT は同定され、B-1 F細胞は LT を産生することが判明した。B-1 F細胞を 10^{-8}M E_2 により刺激することにより、この LTC₄, D₄, E₄ の産生はコントロール値の25%に抑制された。
- (4) 高親和性の LTD₄結合部位が、B-1 F細胞の細胞膜に存在し、その親和性は $0.91 \pm 0.22\text{nM}$ で Bmax は $14.9\text{ fmoles/mg protein}$ であった。結合特異性は ICI 198615 (LTD₄ レセプター阻害剤) 》 LTD₄ > LTC₄ > LTE₄ であった。
- (5) E₂の LT 合成系に対する作用部位の同定を試みた。PLA₂活性への E₂の効果を検討すると、培地中に放出されるアラキドン酸量に有意な変化は認められなかった。次に、リポキシゲナーゼ活性の測定を行った。5-リポキシゲナーゼ活性は48時間 E₂処理した細胞では無処理の細胞の $38 \pm 6\%$ に抑制された。一方、同時に測定した12-リポキシゲナーゼ活性は E₂処理にても抑制されなかった。

(総 括)

B-1 F細胞増殖はエストロゲンにより促進された。又、アラキドン酸や LTC₄, D₄, E₄により濃度依存性に抑制された。アラキドン酸による抑制はエストロゲンにより部分的に阻止された。一方、エストロゲンは B-1 F細胞 LT 産生を抑制した。B-1 F細胞は LTD₄ レセプターをもつことも判明した。以上の結果はエストロゲンは LT の合成を抑制することにより細胞増殖を促進することを強く示唆する。エストロゲン依存性増殖のオートクリンループにおいて LT が主な役割を演じていることが判明した。又、このエストロゲンの作用は 5-リポキシゲナーゼ活性を阻害することにより生じることも明らかになった。

論文審査の結果の要旨

ステロイドホルモン依存性癌の増殖機構は不明である。

本研究ではエストロゲン依存性増殖を示すマウス睾丸質腫由来細胞株をモデルとして、その増殖機構について検討した。この細胞株においては、ロイコトリエンにより細胞増殖が抑制されること、又、自らがロイコトリエンを合成、分泌することを明らかにした。さらに、エストロゲンは5-リポキシゲナーゼ活性を抑制し、ロイコトリエンの産生を抑制することにより、細胞増殖を促進することを示した。

本研究は、エストロゲン依存性癌増殖が、アキラドン酸代謝を修飾することにより生じることを明らかにしたものであり、学位授与に値すると思われる。